技術は

田さんと遠藤さんからそれぞ ョン、ビジョン。まずは、長

## 関西学院創立125周年記念

其西学院大学、每日新聞名

## パネルディスカッション 垣根を越えたコミュニケーションのすすめ

を感じていなかった。

本音ではあまり垣根

たまたま心理学者と一緒に

京都大iPS細胞研究所所長·山中伸弥教授 ーコンピュータサイエンス研究所・遠藤謙氏 関西学院大理工学部·長田典子教授

> は私が知らないことをたくさ 仕事をすることがあり、彼ら

た。脳科学者、心理学者、芸事がうまくいくことが分かっ術と組み合わせることで、仕ん知っていて、私の工学の技

れる。日本に帰ってきて、垣いうことがあれば、一つになン、一方向にみんなで進むと どころに到達できる。

が、早く、しかもいい落とし来てもらって一緒にやる方べく自分の専門から遠い人に 術家、統計の専門家ら、なる 寄り添えるビジョ

テクニックがあってもビジョ 元村 最後に「ビジョン」。 ンがないと世界を変えられな 最後に「ビジョン」。

にして、果たして自分のロボ足を失った後輩を目の当たり 遠藤 大学院時代、身近に

分の身を分割して投じていき 義足、この三つのテーマに自 足、途上国の義足、競技用の

にするだけでなく、 課題がある。単に生活を豊か 面から、価値観そのものを変 つくっていくかという困難な 持続可能な社会をどうやって 資源が少ない中で、

ジを 極めてほしい。一つのことを 極めた人は、キャラが立って、 若者に熱いメ

一つのことを

ヒット ョックだった。歩くための義ながる技術なのかと思い、シット研究が、後輩の歩行につ

授中

りなりますここでいる。

い。から社会に貢献していが強くなっている。科

いきの面

二つ目、三つ目の専門家になても上手で、あっという間にてもらえる。他のことをやっ

失敗は

経験をしていく中で、思いが目標。ビジョンは、いろんな健康寿命を延ばすことが今の けないところに見つかると思

より10年くらい短い。ま健康寿命は男女とも平均

の平均寿命は世界最長が まずはおが、日本

む人は、成功に結びついていこと。好きなことにのめり込でもいいので、一生懸命やる いっぱい大失敗してくださは、いずれヒットにつながる。 あると思うが、失敗したこと に取り組んでほしい。失敗もも、何でもいいから一生懸命 山中 学校の勉強以外で は、成功率が高い。何、小さなビジョンの積 垣根を越える」。ご自身が元村 最初のキーワードは 遠

研究している分野と他の分野

との垣根を越えるのは勇気が

いる。そういった人たちとも、 な考え方を捨てきれない人も 方は人によって違う。 る。障害者に対しての関わり 落とされようとしたこともあ 根を越えようとして、たたき 保守的

世の中になっている。今はい 携しないと、情報量が一人で く垣根を越えた人が成功する ろいろな才能を持った人が連 カバーできる範囲を超えて

分野 専門家

根を越えることが大切だ。早山中 いろいろな分野で垣





元村有希子(もとむら・ 1989年、毎日新 聞社入社。九州・山口での 勤務を経て2001年、東京本 社科学環境部。「理系白書」 の報道などで06年、第1回 科学ジャーナリスト大賞を 受賞。14年4月からデジタ ル報道センター編集委員。 ア・サロー・ファー編集会員。 著書に「気になる科学」「理 系思考」「宇宙へ『出張』 してきます」(毎日新聞社) 「理系白書」(講談社)な ど。TBS「Nスタ」コメ ンテーター、BS11「ウィ ークリーニュースON Z E」キャスター。

## 究をしたことがある。方法は合った色の光を出すという研 と思っている。以前、企業として社会に出して貢献したい の共同研究で、生活シーンに 方、感性を定量化し、価値と れの研究についてご説明を。 長田 人の気持ちや感じ

長田典子(ながた・のりこ) 年、京都大理学部卒業後、三菱電機入 社。96年、大阪大大学院基礎工学研究科 博士課程修了。2003年、関学大に移り、 07年から現職。13年感性価値創造研究 センター長、15年革新的イノベーショ ン創出プログラム「感性とデジタル製 造を直結し、生活者の創造性を拡張す るファブ地球社会創造拠点」サテライトリーダー。専門は感性工学。文部科学 大臣表彰科学技術賞など受賞多数。

だ、と言われた。講演は相当演によっていかに伝えるか

に気合を入れている。

米国時

研究者にとって実験は

、残り半分は論文や講にとって実験は50%に 留学先の先生から、 米国で鍛えられた。

ン力を米国で鍛えられ

(試作品)から使ってもらい、は、ユーザーにプロトタイプ

**傩認しながら作ること。既に、** 

ームの中にユーザーが

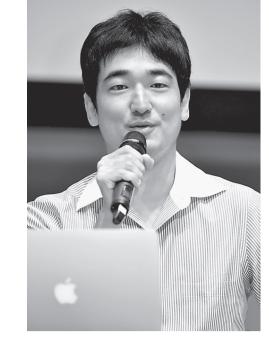
ケーション」が重要になるが と捉えてやっている。 分になる。莫大な情報を私たあり、これは広辞苑200冊 アをもっていても人に伝わら 出てくる。それは仕方のな 重要。 挑戦すれば必ず問題が 者、コンピュー ち医学者は処理できず、数学 遺伝子は文字数で言うと30億 ないと意味がない。「コミュニ にちとどう協力していくかが それも楽しみの一つ いくらすごいアイデ ターの専門家

た。義足開発では、ユーザー 大ーション能力というより は、一方的に自分の情報を短 は、一方的に自分の情報を短 は、一方的に自分の情報を短 とのコミュニケーショ

始まる。言葉だけでなく、表で飛び込んでいけば、会話がプンシステムだ。自分が笑顔 ニケーション。また、人はいのやりとりで、まさにコミュ は自分の外界と内側との情報 も外とつながっているオー

らった。パネルディスカッシようとしている3人に来ても元村 専門の壁を乗り越え 根を越える、コミュニケーシ ョンのキーワードは三つ。垣 た。カタログに載せているとぎ感を与えることが分かっ 方のオレンジ色の光はくつろリフレッシュ感が高まり、タ の参考になるし、

無力感でいっぱいだった。あ最初のうちは何もできなくて 工学系の会社に入ったので、 私は大学で数学を専攻して ものをつくるより先に



遠藤謙(えんどう・けん) チューセッツ工科大 (MIT) で2012 年、博士号取得。現在、ソニーコンピ ュータサイエンス研究所アソシエイト リサーチャー(研究員)としてロボット 技術を用いた身体能力の拡張に関する 研究に携わる。競技用義足開発を行う 株式会社Xiborg代表取締役なども務 める。12年、科学雑誌Technology Reviewが選ぶ35歳以下のイノベー ター35人(TR35)に選出された。

> 立てることに気付き、自分に ると、他の人たちより手前に 数学でシミュレーションをす

スにものをつくろうと思っ

もやれることがあると思っ

シミュレーションをベ



氏遠藤

パネルディスカッションの様子 ―兵庫県西宮市の関西学院大中央講堂で

ちはいない、ただ技術に障害「世の中には身体障害の人た足を失った義足ユーザーだ。 のヒュー・ハー先生。17歳で 大学(MIT)メディアラボ が、米マサチューセッツ工科 の時、たまたま知り合ったの 学。帰国後も「使える」義足撃を受けてメディアラボに留がある」という彼の言葉に衝

が骨肉腫で義足になった。そのバスケットボール部の後輩のバスケットボール部の後輩のバスケットがしまみたいとット研究者の道に進みたいと

はないかと思っている。20ピックを上回る時が来るので 者と障害者の境目は何か、とを見てみたい。そして、健常 20年の東京五輪でその瞬間 ラリンピックの記録がオリン 変えられると感じた。アスリ 吊者に関わらず、みんなが幸 せに生きていけるような社会 った。彼女らの生活が大き ったことを考えられるよう りにも取り組んでいる。

社会で、 というでは、 というではなった。人をで とれるようになった。人をで がつようになった。人をで がつようになった。人をで がつまがるようになり、個 きたいと思っている。 社会を科学技術でつくってい重し、感性を発揮するような を世に出すことを目標に研究

足を作ることにも取り組んで **上国に向け、なるべく安く義足を切断した患者が多い途** 

世界市民を育む、学びがある。